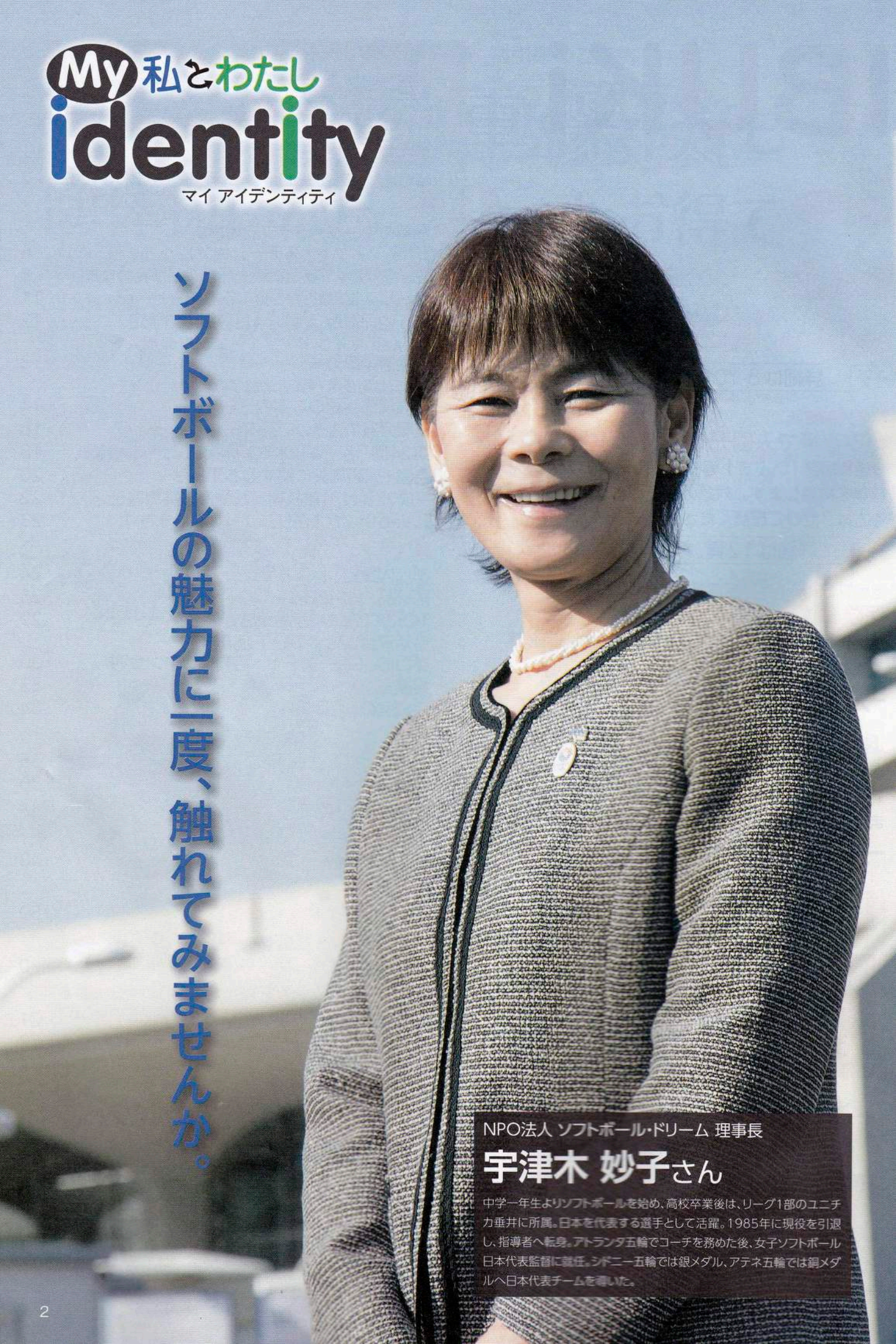
My 私とわたし identity

マイ アイデンティティ

ソフトボールの魅力に一度、触れてみませんか。



NPO法人 ソフトボール・ドリーム 理事長

宇津木 妙子さん

中学一年生よりソフトボールを始め、高校卒業後は、リーグ1部のユニチカ垂井に所属。日本を代表する選手として活躍。1985年に現役を引退し、指導者へ転身。アトランタ五輪でコーチを務めた後、女子ソフトボール日本代表監督に就任。シドニー五輪では銀メダル、アテネ五輪では銅メダルへ日本代表チームを導いた。

小学校時代。
寄贈された聖火トーチを持って
校内を走る代表に

現役選手時代。
全日本ソフトボール選手権大会で
クロスプレーの瞬間

ソフトボールとの出会いが私の人生を豊かにしてくれました。

スポーツの素晴らしさを目の当たりにした東京オリンピック

私が子どもの頃は、今のように地域の野球チームやスイミングスクールがあったわけではなかったので、もっぱら近所の子どもたちとチャンバラごっこをしたり、川辺で遊んだりして体を動かしていました。私が初めて競技としてのスポーツを意識したのは、小学五年生の時に見た「東京オリンピック」がきっかけでした。「世界の舞台で戦う楽しさや凄さ、感動」を目の当たりにし、『スポーツの道に進みたい!』という気持ちを持ったことを今でもはっきり覚えています。

その後、当時通っていた小学校に聖火トーチが寄贈され、校内を走る聖火ランナーになんと私が選ばれました。嬉しかった反面、私が選ばれた理由はいまだに謎で、"宇津木の人生七不思議"の一つです(笑)。

人としての基礎を作ってくれたソフトボール

私は五人兄弟の末っ子で、子どもの頃から活発で足が速かったので運動には自信がありました。ただ、勉強は苦手でいつも母に叱られていたので、なんとか自分の得意なことで1番になって褒めてもらいたいと思っていました。

中学の部活はしばらく陸上部とソフトボール部の掛け持ちでしたが、三年生の夏に県のソフトボール強化合宿に参加し、県内の強豪選手達と一緒に練習したことで、もっと上手くなりたいと思うようになりました。ソフトボールは個人の力に加えて、チームワークも必要。しかも、攻守の両方の要素があり、とても魅力あるスポーツだと感じて、高校もソフトボールを中心に考えて進学しました。そこで出会った顧問の先生から『ソフトボールで宇津木の一番を見つけてみたらどうか』と言っていただき、本格的にソフトボールを始めることになりました。若くて熱心だった先生の練習はとにかくスパルタ式の指導だったので、チームはみるみる実力をつけて、成績を上げていきました。インターハイや国体の常連校となり、高校三年生の時は国体で準優勝するまでになりました。また、生活面でも厳しく「挨拶」「時間厳守」「整理整頓」「責任」の徹底をしていました。後から思うとソフトボールを通して、先生や先輩から今に繋がる人間の基礎の部分を教えていただいたと思います。

学生から実業団へ試練の日々

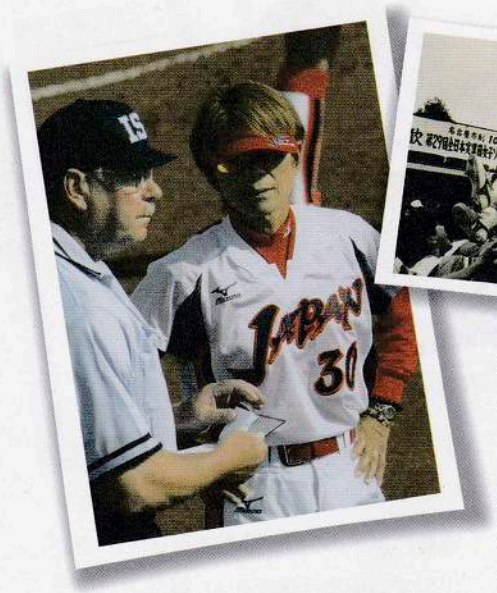
高校卒業後、実家を離れて実業団入りすることに当初父は反対をしましたが、先生の勧めもあり、ユニチカ垂井に入りました。実業団選手はプロ選手と違い、仕事もあります。入社当初は寮の管理に関する担当になりましたが、中でも詰まったトイレを直す仕事は本当に辛かったです(笑)。実業団選手の1日は早朝練習をして、皆が出勤する前に仕事を始め、昼休みはグランドの整備。15時から夜まで練習の毎日でしたから、体力的にも精神的にも学生時代をはるかに超えて厳しいものでした。しかも、意気揚々として実業団入りしたのに「思うようにボールが捕れない、打てない」と自分の力なさを見せつけられましたが、"応援してくれている父に申し訳ない"、"先輩の倍は練習するぞ"と奮起しました。

その甲斐あって、1年を待たずに念願のレギュラーになり、3年後にはキャプテンに就任しました。キャプテンになってからは、みんなが練習に打ち込める環境を作り、リーグ優勝という目標を話し合って決めました。その結果、なんと1年目に実業団リーグで優勝することができました。

父を説得し、初の実業団女性監督へ

30歳を過ぎ、引退と同時に会社を辞めて実家に戻ってからはジュニア選手のコーチなどをしていたのですが、少し経って、日立高崎の工場長から「ソフトボール部の監督をしてもらえないか?」と相談されました。当時女性の監督はいませんでしたし、恩師や父に相談すると、どちらも猛反対。恩師からは「監督よりも、結婚をしなさい」とアドバイスされました。そして父は、「監督という仕事は、ソフトボールだけを教えれば良いのではない。人づくり

これまでの出会いときっかけを作ってくれたソフトボールに感謝しています。



をしていかなければならない。それがお前にできるのか」と問いただされました。それでも監督をやってみたいという気持ちがあったので、学生時代の挫折や葛藤、社会人になってからの仕事の苦労や経験を話しました。父は「そんな苦労をしていたのか」と初めて知る話に感極まり、涙を流していました。最後は「強くて愛されるチーム」にしていきたいという理念や方針を伝え、3年間で結果を出すという条件で認めてもらいました。

強くて愛されるチーム作りに奮闘した日々

実業団スポーツで大切なことは“勝つこと”と“会社全体で応援してもらえるチーム”であることだと思っています。監督就任後、まず、“強くて、愛されるチーム”を部のスローガンにして、生活面から仕事の姿勢に至るまで様々なルールを作りました。中でも高校時代と同様に人づくりの基礎となる「挨拶、時間厳守、整理整頓」は徹底しました。

練習では選手に目標を持たせ、“何のための練習か”を意識させるようにしました。選手が漠然と言われたことだけをやっていたのではチームプレーは生まれません。各選手が“自分のやるべきことが何なのか”を考え、与えられたことを100%できた時に勝つことができます。

また、私も選手を把握するために、練習の事から仕事のこと、些細な日常のことでもいいからノートに書くよう選手に渡してきめ細かい指導に役立てました。

当初、日立高崎は三部リーグでしたが、1年目は三部リーグ準優勝、2年目に二部で優勝し、ついに3年で念願の一部リーグ入りを果たすことができました。

ソフトボール一色の人生 これからの夢

「人生に夢があるのではない。人生が夢をつくるのだ」。これは私がとても大切にしている言葉の一つです。これから私がソフトボールにできる恩返しと言えば、ソフトボールの更なる普及とソフトボールを通して、東日本大震災の復興支援をすることです。

ソフトボールは全身を使い、ボールやバットをコントロールするので、集中力、バランス力が高められるスポーツです。そして、団体競技なので私たちが生きていく上で必要なことを教えてくれます。人生も同様、一人では生きてはいけませんし、生きている間にはピンチやチャンスも訪れます。それを周囲の皆と助け、庇い合いながら、最後は自分で乗り越えていかなければならない。これからの活動で私がソフトボールから学んだ経験やヒントを伝えていくことで誰かの役に立つのであれば嬉しいですね。今はいろいろなスポーツを選択できますが、ぜひ、人生の中で一度はソフトボールを経験していただき、その魅力に触れてもらいたいと思います。

読者の質問にお答えします!

Q 宇津木さんのリフレッシュ方法を教えてください。

朝走ることもリフレッシュになるのですが、やっぱりお風呂に入っている時ですね。温泉とかサウナが好きです。特に大浴場で地域のみなさんと触れ合いながら世間話をしていると、その時だけは監督から離れた自分になれるので、凄くリフレッシュしますね。周りのみなさんに助けていただいているなと実感します。

Q 監督に就任したときチーム作りに1番留意したところは?

どういうチームにしたいのか、選手達をどう活かしたいのか、状況に合わせて1対1や全体のミーティング等を通して、自分の考えをきちんと伝えました。また、選手の考えていることを聞き出すために、普段から「おはよう」「どうした?」等の声掛けや目配せをするようにしていました。

インタビューを終えて…

ソフトボールに限らず、スポーツは、競技を行う楽しさ、観る面白さ、そして、そこには、出逢いと感動も生まれる。その最大のイベントであるオリンピックが、2020年に東京で開催されます。このチャンスに行動しない訳には行かない。スポーツの力を信じて、日本国民が、世界の人が一つになってこの祭典を成功させ、世界の平和を祈りたいです。